

## 土木について考える

大谷政敬\*

先日新潟県土木部に40年奉職されこの3月退職され、民間企業へ再就職された方が、挨拶に尋ねてこられた。近頃は、時候の挨拶並になっている「大変な世の中になりましたね」に始まって、最近の建設産業についてあれこれと話が弾んだ。

停年まで、あと2年程あるが、余力のあるうちに新しい職場に移られたとのこと、そしてご自身の土木に打ちこんできた思いを、淡々と語って行かれた。戦後の復興がまだ不十分な頃に県にお入りになり、住宅難の解消、生産性の向上、消費の拡大など大きな時代の流れの中で、あまりに貧困だった道路の整備、たびかさなる水害や土砂災害に襲われた河川の改修などに無我夢中で取り組んでこられたことを、20年ほど前はじめてお会いした頃の若々しい表情を時々浮かべながらお話された。そして、近頃の建設を取り巻く状況が残念でならないとも寂しげにお話された。

日々自然と戦いながら人々の生活を少しでも便利に、快適に、そして安全にするために市民に近い所で働いてこられた事を素直に受け止めることができた。現職の時高位な役職に付かれた訳でもなく、華々しく活躍されたわけでもありませんが、一土木技術者として充実した生活を送って来られたことを確信でき羨ましくもあった。

ほとんど無に等しい状況から今日のこれだけの公共施設を築くことの一翼をになって来られた氏の今日の建設・土木への憂いを思い、まったくそんな事を語る能力も経験もありますが、土木への応援団の一人としてこれからの土木への思いをつづつてみたい。

バブルの崩壊、景気の低迷、財政危機、金融不安、政治の混乱、官庁不祥事、政治汚職、環境問題等が次々起っている。これは、バブル崩壊以前から世の中で徐々に進行していた小さな歪みや、軋みがパラダイムの大転換として壮大な歴史の転換期を迎えたことによるもので、それらは、すべて形こそ違え、本質は一つであると言われている。今、日本はこれまでやってきたことのツケを精算し、旧システムを再構築し、次なる時代に到達するために、社会の根源によこたわっているパラダイムそのものを大改革しなければならない大変な時代にさしかかっているのだと。

しかし、個々の歪や軋みのはげ口の一つがいつの間にか公共事業バッシングと言う形で集約されてしまっているように思えてならない。不祥事が起こるたびに公共事業、ゼネコン、政・官癒着といったことがポピュリズム的にメディアに取上げられ、増幅される事によって、すっかり公共事業悪玉論・不要論が定着してしまっているようだ。それに対して、世間の非難をすべて否定するわけではないが、今日このような非難に対して土木技術者の側からの反論が少なすぎるようにも思える。

これは、かつての土木事業は今日言われているような説明性や費用対効果など持ち出すまでもなく、有用で、国民からも支持されていた。土木技術者もかつて流行ったCMのように「男は黙って札幌ビール」ではありませんがただ黙々と仕事をやっていればそれなりに評価

\*株式会社キタック

されたし、土木はそんなもんだと純真に信じていたし、なによりも寡黙が良しとされて来たのだと思う。つまり、やりがいがあって、当たり前がいい仕事すぎたから説明があまりにも下手だと。それで土木屋さんは、多くを語る必要もなかったし語らないまま来たのではないか。しかし、今日このような状況のなかで、もう少し専門家としてきちっとものを言うべきではないだろうか。

今この社会にとって土木が必要で無くなったのではなく、かつての貧しかった時代から今日の豊かな社会を築くまでのやり方と今土木に求められることが変化してきたに過ぎない。

近代の土木は少ない予算で早く世の中の要請にこたえるために、土木の対象となる自然や社会やその中に生活する人々の思いを、合理性や効率性というものさしで割り切ってこざるを得なかったのではないか。多くの人々の心や多様な地域の個性を犠牲にしても、自然に働きかけ、一定水準の安全や快適性や利便性をいち早く確保する事を優先せざるを得なかったのではないか。つまり、その時代の中で最善を尽くし、豊かな社会づくりに貢献してきた事は誰もが否定できないのではないか。

しかし一方で、今日の市民意識に対応できずにはほころびが生じはじめていることも事実である。歴史を振り返れば、もともと土木は個別的で多様な自然や社会にかなうように実践を積み重ねてきたものである。その実践の過程では、知的創造や理性的認識の他に感性的・直感的認識や総合的・定性的判断に頼って来たし、それによって自然やその社会と見事に調和した構造物を造ってきた事も事実である。しかし、近年、膨大な予算を与えられ、国家的使命と公共性を課せられたがゆえに、異常なほどの客観性への呪縛から自ら感性的、直感的、総合的なものに扉を閉ざしてしまったのではないだろうか。マニュアル的で定量的に扱えることにおもきを置き過ぎ、個々の技術者の経験や感性をうまく取り込めないような世界を造ってしまったのではないだろうか。それゆえ残念ながら土木哲学のような体系が育たなかったし、そこに今日の土木の悲劇があるように思えてならない。

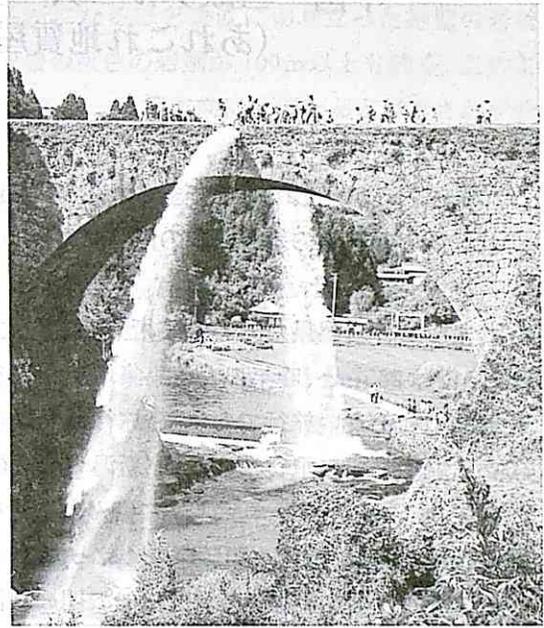
ある程度の社会資本整備が行き渡った今日、土木がかって犠牲にしてきた一方の側面に光を当てる事が大切である。

そこで、土木とは何かをあらためていくつかの書物に求めれば「土木は自然環境のなかでその国の経済事情や社会システムに立脚して、人々の生活やもろもろの活動の安全を守り利便性、快適性を向上させるために科学を活用し技術を駆使して自然に働きかける実践である」と定義されている。一方、文化とは何かを広辞苑から引用すると、「世の中が開けて生活が便利になる事。人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術、学問、芸術、道徳、宗教、政治など生活形成の様式と内容を含む。……」とあり、土木は文化であるとは書いてないが、文化を支えている大きな実践は土木そのものではないか。そして、この大改革の時代に、時代の要請に応じた新たな社会システム、とりわけ新しい文化を創造する事が求められている。そこに今日の土木に求められているものがあるのではないだろうか。そのような土木を実践するためには、多様な自然、多様な個に対し、それらを犠牲にすることもなく、迎合することもしない専門性の高さが大切ではないだろうか。とりわけ多様な自然を一番良く知っているのは土木技術者であったし、中でも自然との接点で土木の底辺を支えている地質や土質の技術者にその使命を担ってほしいと願っている。



● 棚田〔能登〕

風景づくりと土木。日本のアース・デザイン。  
 (高橋他, グラフィックス・くらしと土木  
 一国づくりのあゆみ, オーム社, 1984年  
 11月より引用)



● 通潤橋〔熊本県〕

安政元年(1852年)に竣工。以来今日まで白糸  
 台地に農業用水をわたす水路橋。  
 (細川, 中村: 景観づくりを考える, 技報堂  
 出版, 1990年3月より引用)



● 河童橋〔上高地〕

風景づくりと土木。自然風景と橋。

(高橋他, グラフィックス・くらしと土木  
 一国づくりのあゆみ, オーム社, 1984年11月より引用)